

「しかし、あんたもよくするねエ。散々嫌味言われた婆さんの世話をさア」

「別に大したことしてないですよ。早く元気になるつもりならにはどうすればいいんだろうって考えてはいるんですけどね、よく分からなくなってる」

「元気になって欲しいのかい？」

そりや、という返事が遠くで聞こえた。ヒデはんは縁側に座っているようだが、文恵は用事をしているらしく、いろんな方から声や物音が聞こえてくる。

「あんた、カツつあんに陰でどんな風に言われてたか知ってるの？」

「考え方が少し違ってましたからね、バアちゃん

んと私は」

「考え方なんてもんかい？ あの子は動き惜

しみはせんが、馬鹿だからいくら動いてもだちがあかんでこそ、才がないからしみつたれた暮らししかできんで信吾が可愛そ過ぎるでこそと、そりや、あんた、聞いとられんほどひどい言い方してたんよ」ヒデはんは自分の連れだから、嫁の愚痴を言い合っついてつい言った覚えはあるが、だからといって何も文恵に言うことはないだろう、とカツは聞いていて腹が立った。文恵はハツハツハツハハそんな風に言うのと、と陽気な声で笑っている。

『金持ちの奥様じゃないんだから、金にもなら

ん野菜や花を育てたり、家の中ばかり整えていたってしょうがないだろ』とバアちゃんにはよく言われました。女は、ただ一生懸命働き、

子供をきちんと育て、愛する家族に尽くせ。というのがバアちゃんの考え方のようでした。私も

それは全く同じなんですけど、働く、という

概念が違ってるんです。バアちゃんは、お金儲け

だけを働くことと考えていたようですけど、

私は、お金を得る仕事も大事だけど、こういう、病人の看護や、家族が快適に暮らせるための心遣いは、もっと大切な仕事だと思っっているんですよ

よね」

「あんたは偉いよ、口答えもせず耐えて。病気

になっても仕返しも考えずにこんなに大事にしてるんだから」

「口答えなんてできませんよ。だって、私のこんな生活は、バアちゃんが若い頃骨身を削って作ってくれた家や田んぼがあるからこそできてるんですから。私がいくらお金にこだわらないと言ったって、子供を育てているんだから、必要最低限がなかったら、何を放つたらかしてでも稼がざるを得ないんだから」

「そーいやあ、カツつあんは苦労したね」

「ええ、いろいろ聞いてます、信吾さんから。その苦労がバアちゃんをバアちゃんたらしめているんでしょね、良い意味でも悪い意味でも。……」

げんき 元気なバアちゃんでしたから凄かったですけど、  
わたし きら 私、嫌いじゃないんです。バアちゃんに嫌味を言  
われる度(たび)に、立ち止まって考えたものです、自分  
の生き方(かた)みたいなのを。私(わたし)、反抗(はんこう)はしませんで  
したが(したが)従(したが)うこともしませんでした。いろいろ考  
えているうちに信念(しんねん)みたいなのができちゃい  
ましてね。可愛(かわ)いくない嫁(よめ)ですよ。  
バアちゃんのお陰(かげ)で、泣(な)きはしましたが、私(わたし)、  
自分(じぶん)の人生(じんせい)を、深(ふか)く真剣(しんけん)に生(い)きられたと思(おも)つてい  
るんですよ」

くろま 車の走り去(はし)る音(おと)や雀(すずめ)の囀(さえず)りに混(ま)じって聞(き)  
えてくる文恵(ふみえ)の声(こゑ)。

たつしや 「達者(たつしや)なもんだね。そう言(い)やあ誰(だれ)が聞(き)いてもあんな

しね、あたしやそんなに悪(わる)い 姑(しゅうとめ) かねエ。ソツク  
スや服(ふく)のつぎなんぞする暇(ひま)にや、仕事(しごと)に行(い)きなど  
言(い)っただけなんだからどね。古布(ふるぬの)を繋(つな)ぎ合(あ)わせて  
座布団(ざぶたん)やボロ袋(ぶくろ)なんぞ作(つく)って喜(よろこ)ぶんだぞあ、す  
る事(こと)のなくなったバアの所業(しよげよう)だと言(い)っただけ  
だよ。尤(もつと)も、わたしやバアでもそんな辛気臭(しんきくさ)い  
こたア嫌(きら)いだけどね。  
いふく 衣服(いふく)に關(かん)してだけじゃない、食(た)べる物(もの)から何(なに)もか  
もだ。無農薬野菜(むのうやくやさい)を家族(かぞく)に食(た)べさせたいだ無添加  
り(りょうり)料理(りょうり)を食(た)べさせたいだと言(い)って。手作(てづく)りがそんな  
に尊(とうと)いかい。

わたし むすめ 私が娘(むすめ)の頃(ころ)にやそんなのが普通(ふつう)だったさ、金  
がなくて物(もの)が無(な)かったから仕方(しかた)なしにね。思(おも)い出(だ)

よ たは良くできた嫁(よめ)で、あたしやどうしようもない  
しゅうとめ 姑(しゅうとめ) になるわな。そう、あなたは確(たし)かに良(よ)くでき  
た嫁(よめ)かもしれない。今(こんど)度も良(よ)くしてくれてるよう  
だが、十年前(じゅうねんまえ)の癌(がん)の手術(しゅじゆつ)の時(とき)もそりや良(よ)くして  
くれたもんな。感謝(かんしや)してるよ。周(まわ)りの連中(れんちゆう)に羨(うらや)  
ましがられて鼻(はな)が高(たか)かったしね。うん、良(よ)くして  
くれた。器量(きりょう)は悪(わる)いがあんな、氣立(きだ)てはいいよ。  
てさき 手先(てさき)がとろくて急(いそ)ぐ間(ま)にはあわんが、根氣(こんき)はいい  
もんな。梃(てこ)でも動(うご)かん片意地(かたいじ)などこはあるけどね。  
やさしい癖(くせ)に強情(ごうじゆう)ってやつだわな。ナニ、悪(わる)かない  
さ。いけすかないだけだよ。あんなといざこざ起(お)  
こすと、いつもわたしの方が悪(わる)者(もの)だからね。善人(ぜんにん)  
ぶったその顔(かお)で皆味方(みんなかた)に付(つ)けちやつてさ。しか

したくもない、惨(みじ)めな暮(く)らしさ。

しかし、今(いま)は物(もの)は溢(あふ)れてる時代(じだい)だよ。安(やす)い良(よ)い物(もの)  
かんたん て 簡単に手(て)に入る御時世(ごじせい)なんだよ。プロはそれ一  
すじ いのち 筋(すじ)に命(いのち)がけで工夫(くふう)しながらやつてるから、何(なん)  
あれ素人(しろうと)が慣(な)れぬ手(て)つきでやるより安(やす)く良(よ)い物(もの)  
ができる。有(あ)り難(がた)いじゃないか、ええ、それをな  
んだってわざわざ手間暇(てまひま)かけてみつももない物(もの)  
じぶん つく ひつよう 自分で作(つく)る必要がある(ひつよう)んだい。市販(しはん)の物(もの)は儲(もう)け第  
いち 一(いち)に考(かんが)えているから身体(からだ)に良(よ)くないって？ 明(あき)

らかに悪(わる)い物(もの)はお上(かみ)が許(ゆる)すわきやないさ。よしん  
ば少(しょう)々(しょう)ぐらい悪(わる)くたって、それがどうした。  
にんげん 人間(にんげん)はどう生(い)きようといつかは死(し)ぬのさ。こたわ  
ったところで大(たい)した違(ちが)いなんかあるもんか。自己(じこ)

満足するだけのとき。  
貧乏臭いっただらありやしない。そうしなきゃ生き  
てゆけないってんならともかく、そんな生き方を  
わざわざ選ぶあなたの気がしれないよ。第一、好  
きなあんたはいいが、巻き込まれる亭主や子供が  
いい迷惑じゃないか。幸い子供は普通に育った  
から良かったものの、わたしや時代遅れの野暮て  
んになるんじゃないかと随分心配したよ。まった  
く。子供は利口そうでも子供だし、信吾は何を考  
えてるんだか今一つ分かんない男だから、私が  
言ってやったのさ、時代に合った人並な生き方を  
しな、とね。結構なことだろうが、今を楽ししく生  
きる、と言ってやってんだよ。

と、カツは憎まれ口を並べていた。これがカツの  
性分なのか、いつもは、意識もおぼろですぐにう  
とうとうと眠ってしまうのに、こういうことを考  
えているときだけは迷界をさ迷っている人間と  
は思えぬ程、元気だった。  
二人の話から、峰子の子供が警察沙汰になる  
ことは免れたことが分かったので、元気になった  
のかもしれない。自分の嫁の不倫相手に殴りかか  
ったということだが、幸い傷も大したことはな  
かったようだ。

わたしやね、信吾に、いやというほどゴルフに行  
かせてやりたいんだよ。コースに出るのは月に一  
度、なんてケチなこと言わないでさ。アルマーニ  
っていうのかい？ 時々来る信吾の友達が着て  
るスーツ。あんなのを、うちの信吾にも着せてや  
りたいんだよ。信吾は家でとぐるを巻いているあ  
んたとは違うんだから、人目ってもんがあるんだ  
からさ。

わたし、何か間違ったこと言ってるかい？ だち  
あかずでしみたれた暮らしが好きなあんたより  
よっぽど正論じゃないのかい？  
尤も、間違っていると言われても今更どうしよ  
うもないし、直すつもりもさらさらないけどね」

(六)

カツは一 張羅の銘仙を着て、近所の友人と二  
人で久しぶりに町へ映画を見に来ていた。その帰  
り道、付かず離れずしながら若い男が後を付け  
て来ているのに二人は気が付いた。

「カツちゃんの美しさに見惚れて付いて来てる  
んやわ、絶対」袴をはいた女学生スタイルの美雪  
が言った。

「なんで私なんかを。美雪ちゃんに決まってるよ」  
カツは謙遜して言ったわけではない。色が抜ける  
ように白く背が高い美雪は、山吹色の金紗の着物  
に藍色の袴がよく似合った。両脇の髪を後ろで

たねて、着物と同じ色の大きなリボンをつけているのもオシャレで、映画館では何人もの人が振り向いたものだ。男は熱い視線で、女は羨望のまなざしで。美しいからというのもあったのだろうが、田舎のこととて女学校に行く子は少なく、その格好が目立ったのだ。近所で気が合うから仲は良かったが、育ちの良い美雪が自分などの比ではないことを、カツは幼い頃から知り抜いていたのだ。

在所に入って美雪と別れても、足音は聞こえた。不審に思って振り向くと、若い男はカツに付いて来ていた。目が合うと、男は丸い目をしばたきながら、思いつめたようにカツを見つめていた。

初めて出会ったときの、少年の面影を残した清だ。

カツの心に、お嬢様然と取り澄ました美雪を負かせたような快感が湧き上がっていた。あの日さながらに。

「あんた！」カツは喜び勇んで清に近寄ろうとした。すると、ツツツ、と清は退き、長いトンネルの向こう側に行つて、一握りほどの大きさになつてしまった。

トンネルは真つ暗で何やら不気味だ。しかし、彼方に見える小さな明かりの中には紛れもなく清がいる。清は、あんな白豚ではなく自分を待つてくれている、そう思うと嬉しくて、カツは意

を決して歩もうとした途端、頭に大きな衝撃を感じた。

「何事じや？」と我に返ると、全てが消えてしまった。生々しい清の面影に心を残しながら、カツは外の気配に意識を向けた。

「気をつける、あんまり衝撃を与えたらいかなぞ」信吾の声だ。

「バアちゃんが起きるきに？」スミレもいるようだ。

「ウーン、起きるのはええんやけど……」信吾が言い淀んでいる。

「不愉快な起こし方したらバアちゃん怒るがな。バアちゃんが怒ったら父さん今でも恐いんやか

ら。な、父さん」ミミミの声だ。

「そら恐いやるな」と信吾が情け無い声を出している。

(以上10月14日放送分)